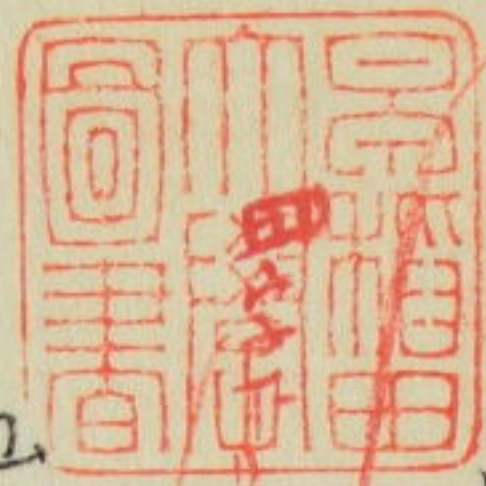


1首
679
1-

高尾考



高尾七代之事

初代高尾

仙臺系の事一考れを略す法名傳譽妙順といふ此道哲
小墓あり

二代目高尾

紀伊中絶之殿内家来り五百石取以最上吉方といふの法也一紀伊
一法也如く是をさし上之尾といふ

三代目高尾

水戸宰相殿為替所用水谷六右衛門らけは右六左衛門平右衛門
と云ふ八半小ある男と不茂と出奔をその中半をうんら
妻と打るすは牧野強河と妻を公におく申小恒河野平馬と出奔は
すは深川の松本結の女房ありそれより後者袖岡と申女房となる



此紋
紋二
紋

又三河阿元弦油此女房とありしはある付大おんああの梅倉屋といふ家
屋のあふきつり多ふん死を是を水谷之尾といふ

四代目之尾

三万石浅野重政の法也を是を浅野之尾といふ

五代目高尾

緝屋九希多衛法也を四代目小あきとらうき女を華流跡もとの外
ろく心之をのをりて 城の貴人の妻とあるもげづからぬ生れの上
し志ろあ九希多衛を何き男少て背初きくけあひし様眼まここ
此外磯男ありしう志ろし法也して随分申むすく慶しとなり九希
流との小あきとらうた流しと人まかひつりし由え是をだあ之尾といふ

六代目之尾

拾五万石柳系式部大輔法也式部大輔隠居被作付越後國之田の
を承ふらつべき流多り式部大輔死去の後尾とぬり後世を承ひ始末を

病死

七代目之尾

何れ法也とす事なきは年明ケ出りぬ不近來本控御要りあふ
水原屋の女とありしを承ふりぬの事由縁の事候いふ候りしや不知
右より通之尾を七代を絶つり以上之尾の由承ん子を承ふのみ

右ハ中當り右あふ力原哉をまもの初りを出留置かを写すもの也
○按原式を夫盛和の記を承り詳ありと云へし予吉原古板の書を再考する小三
浦家往古より之尾何世の代の之尾九代の之尾あふ云事古書小見四
條を左ノ諸書を抄出して席列し好事の者此考訂を執つのみ

- 下字二
- 吉原草摺引
 - 吉原大黒舞
 - 吉原丸鑑
 - 新吉原細見圖

- 下字三十
- 元禄七年板
 - 寛永六年板
 - 享保初板
 - 享保十三年板
- 上字四

此紋一
紋二
紋

此紋 紋二

字下

田字下

さつてもあつちほんさう百九代ごうせふんの御宇慶長のむく珠城の都ふふ
 まそふ川の波さつふふ東家ゆふもおとらふさつねが花のお江戸の道にや
 けやうと善つくり民の町あそ美を法くもふは名里を柳町とさうたてもんま
 うの表とさうしよりも山平の吉野三浦が名をいふまの表を一大ふり、
 やういふ人れを名いふいふの昔あふりりれどもさ尾の名い代りつて
 き六代の後流ふ三浦の介高雄とて鳴る新町をいふあふりりおいてハ
 一貴堂まこれけりものて容融うるわくこのも名いふあふりり物ご
 る名よ心やういふ情をあらけ諸君もあふりりてあふりりあふりりあふりり
 の田をあらけいふあふりりて意味あふりりての名あふりり

高 雄

太 史

高町三浦口市左内

按スルニ此高尾仙臺高尾ヨリ三代目ナルヤ四代目ナルヤ不審且
 此書ニヨレハ柳町ノ比ヨリ高尾アリ

ワ
 人
 心

按此時高尾ナシトミナリ

は次

京町 三浦口市左内

名 史
 史 史

評略

やうて
 まらぶ

搭子
 いま
 小むらさき

評略

京町 三浦口市左内

口
 の
 か

評略

京町 三浦内

かくのこどくつふきて今高尾をいふ名ハ仙臺高尾
 比事ハ万治年中のことあるハ申強しと出あつて高尾ありて

寶永六年己丑板

武陽豊嶋郡真土山之住作者流宣

吉原大黒舞云

黄表紙横本
 五冊

江都書林

松野守ちん
 秋父吉を簡
 古抄巻を簡

一行アキ

一行アキ

二字アキ

紋ニツ

③の改ニ行ニ字

紋ニツ(二字読)

一字下
一字下
一字下
一字下

▲**上上吉** 松の位為のそあけりし君をきよき事にも事成ともは交のき尾取たえ
ハ二の位は後一す〜は君取たれ人もふも浦も道程はきりきり
と床あぢ心といひ諸流の何ふきりきりあま大極上〜也

按此年高尾出来ミト見ヘタリ此評ニヨリテミレハアゲマキが先ニツヤトセル
モノ高尾ニナリタルナラン

京町を丁目中の丁も右側
③ **格子** 三浦はら

中々夫 二人壳	志けさき 一人ふら
井あけり 二人壳	うらやま 一人ふら
心 二人壳	こよさん 一人ふら
二人壳	まんさん 一人ふら
二人壳	ひんさん 一人ふら
二人壳	かほよ 一人ふら
二人壳	玉ころも

奉書摺音表紙ノ細見也

板元
新京橋町
三文字屋又四市
平野屋若六

一字下
七字下
一字下
一字下

のききせの初袖くきやくれもやうな申を女神の法とよまれぬ人もこぬ人
閑人らもききせを里の山にまひくま〜
みちをよき〜山名をもちぬ〜
扱てきぬきを付れ〜
さみん小〜はちやの湯ま花〜
風ぞ〜はらぶき〜
せん評き〜
何人のよき〜
三浦のきき〜
▲**上上吉** 松の位為のそあけりし君をきよき事にも事成ともは交のき尾取たえ
ハ二の位は後一す〜は君取たれ人もふも浦も道程はきりきり
と床あぢ心といひ諸流の何ふきりきりあま大極上〜也

京町大三内

京町大三内
九字上
三字上

綴ニツ
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩

別〇〇

附録

三浦倉内二代目高尾古墳之譜

江戸砂子江戸麻子赤糸記
河内法三年傳夢妙心信女と法名ありたる書
伊豆星をんふ法名の文字即字を違りたる圖を所せぬ

瀨名氏源貞雄誌

(因名す)

三子

ワ

+

ル

③

一字下

三子下

キア字一

按三浦倉内尾仙臺高尾ヲ以て初代トスルハ非ナリ宝永
ノ吉原大馬舞ニヨシバ此名里を柳町ヨリ多きをイドヤ
のま(六カ)カトシテハカガ吉原三浦ガ高尾とて古史
此名を一天ガガヤウ下略是名ヨリ高尾有ルハ必ヨリ又
福七年ノ吉原多馬舞引ニ高尾今ハおヤドさ白のこへ由
てト略トアリテ同書ニ此君イモこーちいさーとソトモ
だういともちまあーくそあーりゆらにちきこんまて
ころをのひらくまをもくもやさんハハかてがもト略
トアレバ元禄ノハジメ高尾アリニナルベシ且宝永ノ吉原大馬
舞ニ古代ノ高尾トアリ享保ノ吉原九澄ニ元祖高尾ヨリ
九代ノ後流トアリ是元祖高尾ヨリノ代ナルヘシ全原盛和
カ口授スル所ノ高尾ノ中何代ニアタルルマ未詳

天明丁未季秋廿八日

巴人亭主人戲書

上字一



表の字紙ハ 逆折ニテ凡葉圖ヲ記入
裏の方ハ 古葉図ノ圖ヲ入ル



如斯ありてふ所の宿願の如く是の如く碑ありては轉る所
身。碑ハ海子之谷の春慶院より四面塔の碑あり万治年中伊達綱宗
之尾を教言されを去佐常比淨福理ふ造りて其の時記「このふり」
かりて及哲よりたりし碑ありと云々家において「予」之谷所春慶院
ありて尋ねるふかのはあふたがた古碑ありと左に書圖を

道

田畠

三上

如新万治二年正月五日と云道哲此碑より万治三年正月五日と云

以

雄と云傾城を自継と死す事ハ何れとも法名釋世の句「同」事の
巧みきや何れ一方ハ仍作せしものあふ偏小是ハかの為つ所なるがた後年
淨福理より所教化せし所なるがた「予」き伊達とありたりしを
造りて世をやりし「予」の「予」を造りたるものありたりしを
慶院の誠の妙身ハ碑如此埋れざるがた人ハ亦く道哲の虚妄の碑を江戸
砂子江戸鹿子「予」しとありて世人のとりはをも事あげたりしや又
妙身ハ幸ありしもの此の傍心ある人江戸砂子江戸鹿子の先板の「予」
を補ひて妙身ハ誠の送骸の御りし事慶院の古實の碑を世にあらしめて供
養ふものなり

又いさく道哲を法名釋世と一字もたがた「予」も同に年曆一年を以
て「予」の事ありしもの「予」を推考する万治二年かの妙身没する後
「予」の事ありしもの「予」は「予」綱宗大河之股の邊に船をうりて
わけらる事ありし事「予」道守「予」法名も石碑も巧みきいし「予」

教ニツ

綱宗

手書

賤

いふ所の^跡行の^跡修りや徳居閉門僧有らうと万治三年の^中日記に
此バ疑ふ事ありと云綱宗の切害さま一^等修り事を後年^等修りて
貴勝もそと^せふも^せき道哲を^せ碑を^せま^せり^せに戒名を^せ附^せきん
もいふあれは^せ喜慶院^せの^せ先^せの^せ名^せ離^せの^せ法^せ名^せ辞^せ世^せを^せ用^せひ^せれ^せも^せ年^せ号^せを^せ
かり^せ万^せ治^せ三^せ年^せと^せし^せて^せ綱^せ宗^せと^せ言^せふ^せれ^せお^せま^せり^せて^せる^せ人^せを^せさ^せる^せが^せん^せん^せ
態^せと^せ万^せ治^せ三^せ年^せと^せし^せり^せた^せる^せあ^せる^せも^せみ^せ舟^せを^せ切^せ害^せさ^せれ^せり^せあ^せれ^せば^せあ^せる^せあ^せる^せ
され^せも^せ辞^せ世^せの^せ白^せの^せ身^せに^せ消^せ合^せさ^せる^せは^せ是^せも^せ十^せ二^せ月^せと^せ記^せし^せる^せも^せ此^せあ^せる^せあ^せる^せ扱^せ
轉^せ譽^せ妙^せ身^せと^せ戒^せ名^せと^せ言^せふ^せ綱^せ宗^せの^せ切^せ害^せさ^せれ^せり^せ言^せふ^せ解^せら^せれ^せり^せそ^せの^せ先^せ
代^せに^せ多^せ分^せあ^せる^せ一^せ

三子下

一子下

六子下

○巴人亭 按其角みふ一粟集ノ中
遊心寺ノ高雄カ唐 名一ノ石を^{コケ}松^{コケ}小^{コケ}葛^{コケ}の^{コケ}根
イ丸
按^{コケ}これ^{コケ}幾^{コケ}代^{コケ}の^{コケ}高^{コケ}雄^{コケ}あ^{コケ}る^{コケ}や
○水代橋西の橋つめ^{ケン}脊^{コケ}臘^{コケ}地^{コケ}神^{コケ}の^{コケ}宮^{コケ}の^{コケ}石^{コケ}の^{コケ}人^{コケ}これ^{コケ}仙^{コケ}居^{コケ}之^{コケ}尾^{コケ}の^{コケ}首^{コケ}此^{コケ}ふ^{コケ}れ^{コケ}り^{コケ}る

を埋めて小祠をあり^也 女の子の縁切の影を^也 梯を^也 踊ると^也 是^也り^也此^也の^也事^也よ
やと^也ん^也年^也月^也未^也詳^也 近^也に^也舟^也の^也下^也段^也大^也橋^也を^也た^也ら^也と^也い^也ふ^也人^也正^也月^也元^也日^也小^也川^也き^也女^也首^也を^也と^也り
○去^也の^也道^也哲^也ふ^也尾^也に^也羽^也子^也板^也と^也あり^也今^也の^也岳^也控^也の^也代^也り^也と^也あり^也古^也風^也
あり^也標^也あり^也

換標

カマ

巴人亭

三浦家傳説

高尾續扣

- 一字一
- 初代 元吉原 不知
 - 二代目 町人 水谷 芳法
 - 三代目 仙居 國之身法
 - 四代目 町人 上吉原 身法
 - 五代目 だそめ 芳法 後
 - 六代目 柳原 身法 十九歳

寛保元年

正子アキ

殺ニツ

高尾考補綴

三才下
四字下

三浦屋方上仕舞の年扣
宝曆八年

は座候

ア

キ

別〇 版〇

高尾考補綴

引用書目

一行下

鏡

三子下

つばま物語	新喜原幕揃	書名不知細見記	細見記	細見記	細見記	美里の春	里の家名記	細見記	江戸巻六十帖
全寛永廿	元禄四	享保十一	元文四	寛保三	延享三	延享五	宝暦五	寛延中	享保中

十字下

吉原袖鏡	書名不知細見記	雨巴色言	細見記別本	細見記	細見記	細見記	加ふ石松	入相花	泡影記
中心板治	中心板徳	享保十	元文	延享元	延享四	寛延二	宝暦五	自元禄元年	記添写本

十字下

至

あつぬお語

寛永廿年

板本 元春系 細又記

七丁

江戸町

一 どんぶりん因

こし。いちやう。たうを。ふへえ。さ月

江戸町 ツキ 中畧

一 甚良の因

こし。むへん。たうを。あや。いくた。やたき

。たんご。たのむ。あけ。さりん

。たくみサ。うつま。十六。くらぬれすけ。十一

。すい十八。うつしき。十六

た甲ふ。よーれ十三。せきあう。十四。三りさ。十六

あつぬお語のいさよのせきあうのきんとーのそのなるんもあきゆうぢよ
まじりまじりありぬおとこをさつり月むしむし
おしひ三人のきみちち一首よむ
みちふきよのをさつりせきあうの
きとをさつり月むし

京町

一 わり三つ因

こし。まつうせ。たんた。又さ。たうを。大さ。

た甲ふ。かーき十五。せきあう。せきや。うめの介。あゆの介

。し。ろ。の。介。あやまん。う。の。天下一

あつぬおとこをさつりあつぬおとこをさつりあつぬおとこをさつり

かーいさのそのふゆのそをさつりいさ

よしの。きとねを。あつり

一 九つたの因

こし。おと。い。あま。まつ。おとめ。まつ

。さきやう。まつ。も。わさ。とう。い。たうを

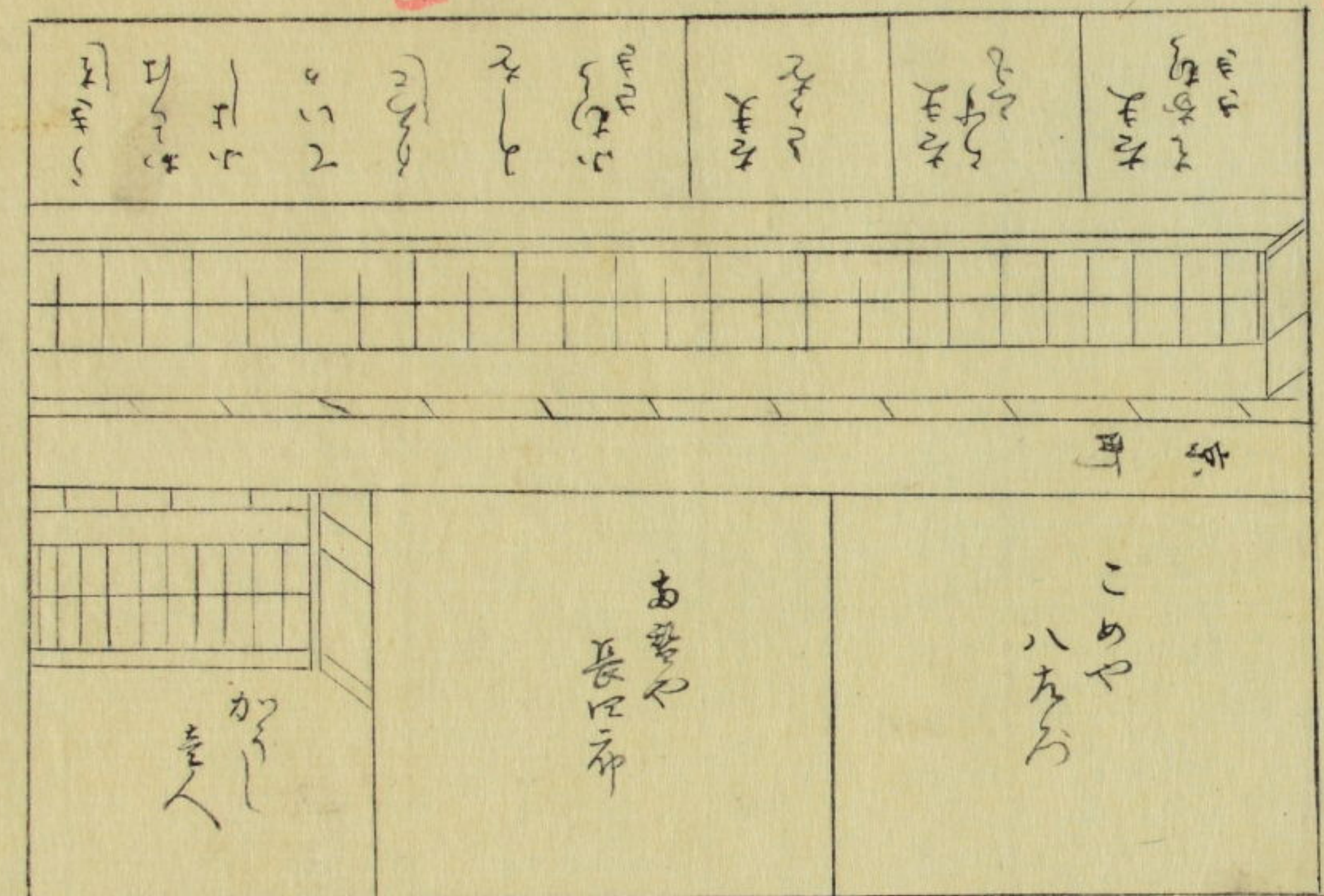
た甲ふ。でい十一。うの介。十二

あつぬおとこをさつりあつぬおとこをさつりあつぬおとこをさつり
あつぬおとこをさつりあつぬおとこをさつりあつぬおとこをさつり
あつぬおとこをさつりあつぬおとこをさつりあつぬおとこをさつり
あつぬおとこをさつりあつぬおとこをさつりあつぬおとこをさつり

一字詰

治物

19 版一



按ふは細見横本にて五冊モノ之
上巻脱して年号あるを虫名
もあらば作者板元の名を考
ふらば室永正徳の細見之
三浦倉ハとト
③ノ平トモ
④ハ板の事乎
按スルニ石川流舟ハ元禄二年
板江戸園體の作者也此平ニ回
體の末ニアルニ同一回ハ浮世縁
跡ノ跡
流舟石川伊左衛門俊之トアル
是也

同
紋

京町分
板本
五冊
江戸本通油町
佐藤四右衛門
相模屋太三

作者
繪師石川流舟
筆者

奥書左ノ如シ
三行布
二十字詰

板本
江戸本通油町
佐藤四右衛門
相模屋太三

19 甲
四行位

高尾考追加
楓 此 洛 葉

三平下
坊の事
みづらぎとありけし加えうこれ末をんれが
人の事いふようかぬをもて戯場ま、よう
もの人の事いふもあつらんを必ああると
あつらんを穿たんとは村人のあつらんを
あつらんを穿たんとは村人のあつらんを
文化のそやふい廿分地々里吳陽入るからの固坊
上字

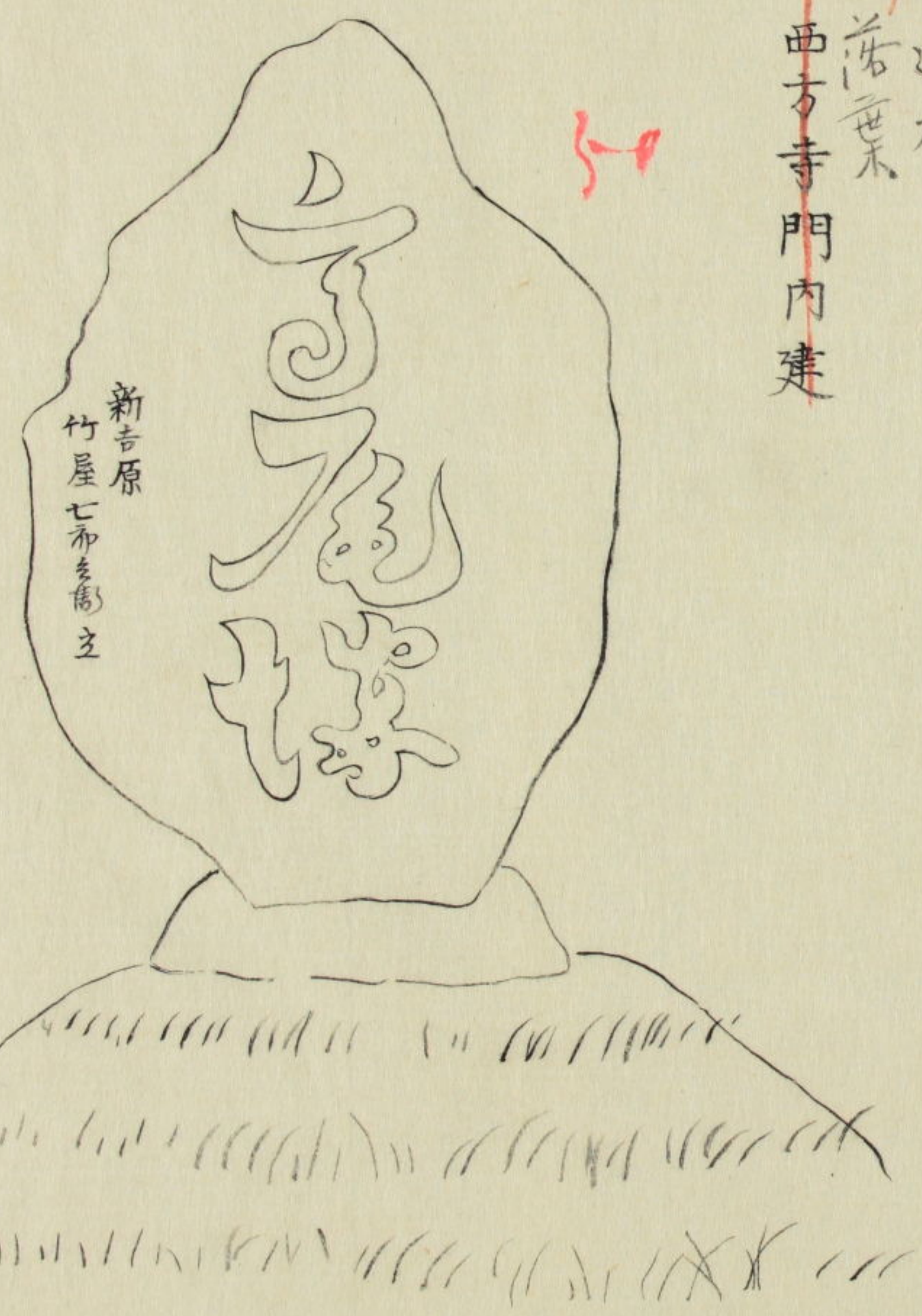


同
一

三下
別
段

高尾考追加
楓の落葉
弘願山西方寺門内建

表



表の裏とを一段と読める
同二並べた太字と小字の位
二

はか〜り
取巻一本植より

三文字下

しあふ下 辭世の句 十二月の御茶もちの時...
ハ十月の夜 御り 以葉トは...
の墓 御り 古代のもとも...
輪を 御り 塔の 表...
く 道 哲を 墓を 建...
轉 譽 妙 身 の 為 也 と 仰...
年 経...
多 ぶ お あり...
れ ば...
渡 莫...
文化 己 巳 十 月 の 中 比 十 日 御 り
文字 志...

フタル

三文字下

四文字下

吉原遊女高尾七代

下字

右に 碑 山...
按...
是 也

一行

仙臺高尾

初代高尾

傳譽妙順

板本ニ三浦屋ガ内二代目高尾万治三年傳
寺俗ニ土ノ島の道哲ト云
按ニ法名ハ如圖妙身有る。

最

仙臺高尾と云能く人の知る不ふれ...
の 御 世 を か...
二 代 目 高 尾

事七

股

紀藩 五百石 竈上吉左衛門根引て是を竈上之尾とせり

三代目高尾

達

根

左衛門

水府侯為智用達水府侯高尾根引て其の後之尾が内平左衛門
ののこみより出奔されり津田あびを忠告の事ありまを
梁雲と通してこり後牧野駿河侯へ喜ぶて氣又小性平
馬と密通して女をさるる河川八幡の生業松尾をたのめ
ありそれより能優者袖岡政之助方へ入り政之助が婦事と成る
後如何ありや河野時高大將も河野孫次郎と云ふ名を
色外に死をこれに水府高尾といふ

一 宇
揚る古語も女と少人といひはけり云々況や傾城傾城のあぶ
をやとあうくをゆき下りたれども怪を告めしうちの死のし
をいへば遊君の極とも云きう腕の治の尾いせきよく死
臨み水府高尾の流泥ふ倒るるの名をたそりんをいへて如
下

天地懸隔の遠いあると云や

四代目高尾

河野高尾 三郎 引をいへてこれを河野高尾といふ

五代目高尾

紺屋九多郎根引を以九希多郎が流物ゆめありきりてこれをも
一多の流方よりいへば世以て河野高尾のと評判ありしや是を
高尾の尾と云

六代目高尾

越後の侯に引て河野國之隱居の如く死後之尾を
河野の尾と云

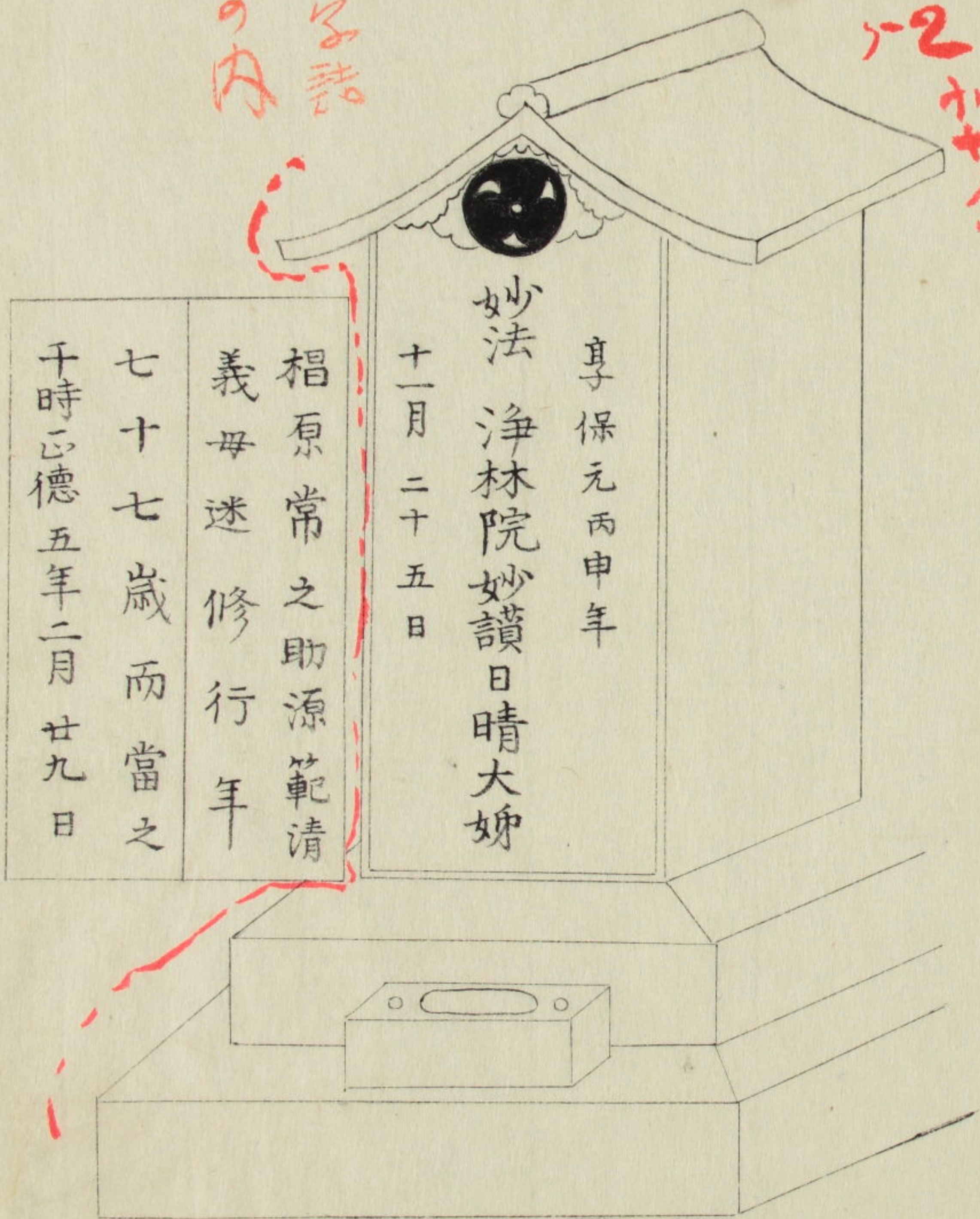
七代目高尾

目 目 目 目 目

中二一

二四十二字
十三行の内

ハニ
ハニ



下字一

何人相引きや又年の限り其廊中を敵はるるは築地系
 へ水着をきりて世の評判はしるその好いなりしやあはれは
 之尾ありと云
 或説ふ所の此の程に尾ありと云ふは
 昔程ふ尾をいふとあつたその尾を相引きし
 内方と云ふんが世に出ず
 今ふ彼はよ尾が現るありし是を
 内方より終りしと云ふよし

升時明治十九年下秋

筆者

專木頼徳



Faint vertical text on the left page, possibly bleed-through or a title, including characters like '明治十九年' and '下秋'.

